

## 創作能『不来子先生—たたかわざる者 R.H. ブライスと H. ソロー』(再演) を観る

On the New Noh Play *Blyth-Sensei*

三上 紀史  
MIKAMI Tadashi

---

**Abstract:** The New Noh Play *Blyth-Sensei: Men Who Would Not Fight Henry Thoreau and R.H. Blyth (revised)* was presented again at the National Noh Theatre on November 18, 2020. It is indispensable for a New Noh Play to have a message which appeals to people of today. The New Noh Play *Blyth-Sensei: Men Who Would Not Fight, Henry Thoreau and R.H. Blyth* has a message which aspires to the peace of the world. Professor Blyth appears as *Shite* in this Noh play. He walks on *hashigakari* (a bridge-like walkway of a Noh stage) as if it was an occurrence in a Zen Meditation. He moves like *kakeri* dance instead of an ordinary *mai*. The movements suggest the bitter struggles to establish the peace of the world. The stage setting of a tomb was skillfully devised.

---

私は創作能『<sup>ブライス</sup>不来子先生——たたかわざる者 R.H. ブライスと H. ソロー』の再演（2020年11月18日 国立能楽堂）を観た。

創作能は、台本を能の形式にはめこみ、上演様式を古典能になぞらえ、舞台で表現されたものは、現代に訴えるメッセージを含んでいることが求められる。演出も古典能にない新しい趣向を盛り込む必要がある。創作能『不来子先生』はその要件を満たしていると言える。

ブライス先生と聞くと、私はすぐに先生についての個人的な思い出がよみがえる。私は大学院修士課程の二年間、ブライス先生の講義を履修した。一年目の講義のテーマは「文学における愛について」で、二年目は「シェークスピアの作品の中の愛について」というものだった。授業中に先生は人類愛や世界平和についてはっきりとは言及されなかつたが、愛についての哲

学的考察の延長線上に人類愛や博愛主義者としての思想があることが、言葉の端々から感じ取られた。

創作能『不來子先生』では、プライス先生はシテとして登場する。先生を個人的に知っている者には多少の違和感があるが、あの世からのメッセンジャーと考えれば問題はない。舞台では、シテは橋掛けに置かれた墓の作り物から尺八の静かな音色に乗って現れる。禪の瞑想の中の出来事のような情趣がある。墓の作り物は最初は多少の感を違和感じたが、見ているうちに、通常の墓の作り物にない工夫が施されていて面白さを感じるようになった。シテは通常の舞を舞うことには適さないので〈カケリ〉に似た動きにしたのは正解であった。この動きの中に、人類愛と世界平和を希求する苦闘を読み取ることができる。

この創作能の台本はメッセージ性を重視したために言葉が明解で、〈暗示〉という能の効果はやや弱くなるが、能の様式性がその明解さを緩和しているように感じられる。

またこの台本には「不來子とは、訪ねて来ぬ人、この世に来たらぬひと」とか、「人生に意味あるは、その苦闘が絶望的なるときのみ」など、哲学的示唆にとむ台詞が散りばめられている。